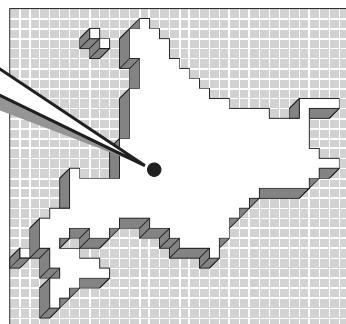


連載 わがマチの自慢 №.27

新篠津村

大都市近郊に広がる美しい田園を活かしてまちづくり



札幌市から車で北東へ一時間ほど的新篠津村は、石狩平野の西部、石狩川下流の右岸に位置し、東西八・七km、南北一四・三kmで、総面積七八・〇四km²の小さな村である。



まるでプラネタリウム

以上が農業に従事しており、農業を基幹産業とするまちはある。

村の人口はピーク時の一九六〇年には五、五〇〇人近くに達したが、三千人を切るまでに減少している。

土地は極めて平坦で石狩川右岸の一部、篠津川両岸の一帯を除きほとんどが泥炭地である。この泥炭地が耕地化され、現在では村の総面積の六六%が耕地で、その九割が田である。村の就業人口の四割

世界銀行（当時は国際復興銀行）の融資を受け、一九五一年から施工していた国営のかんがい排水事業を包含して、一九五六六年から総合開発事業として本格的な水田整備に着手した。その基幹施設が篠津運河（篠津幹線用排水路）で、全長二三km、石狩川頭首工（月形町）から取水し、排水

**豊かな水田地帯へ
“篠津地域
泥炭地開発”**

（こうして新篠津村は、戦前の畑作から大規模な水田地帯へと変貌した。ただ、工事完成の時期がコメの生産調整の始まりと重なったことは皮肉な巡りあわせであり、コメは徐々に量から質が問われる時代に移っていく。



篠津運河

整備後も年数を経過するに従い水利施設の老朽化や泥炭地特有の地盤沈下などによる路としての働きもして石狩川下流域（江別市）に合流する。本事業では、揚水機場・用水路や排水機場・排水路の整備、農道や橋梁の建設、暗渠排水、客土、防風林植栽、開墾なども行われ、一九七一年に完了した。かんがい排水事業の着手から二〇年の歳月を要し、二〇億円余りの巨費を投じた大工事であった。

（こうして新篠津村は、戦前の畑作から大規模な水田地帯へと変貌した。ただ、工事完成の時期がコメの生産調整の始まりと重なったことは皮肉な巡りあわせであり、コメは徐々に量から質が問われる時代に移っていく。

センサステータから みた農業の構造変化

表1に新篠津村の農業構造の推移を示した。一〇一〇年の農業経営体数は二三三経営体で、五年前に比べて一四経営体（九・七%）減少したが、な用水の不足などに対応するため、国営のかんがい排水事業や道営等の各種関連事業が継続して進められており、揚水機場の統廃合による水管理の合理化や、水利施設の改修、ほ場の大区画化や客土、集中管理孔を利用した地下かんがいシステムの整備などが行われている。一〇一四年四月からは新しい石狩川頭首工による取水も始まっている。

農業経営体の経営耕地面積は四、七八五haで、田が八六%を占める。借入耕地面積は三七一haで借入率は七・八%となり、石狩管内平均（一六・一%）や全道平均（一五・〇%）に比べるとかなり低い。経営耕地のある一経営体当たりの耕地面積は、五年前に比べ一・四ha拡大し一・五haとなった。米の主産地として道内有数の規模である。北海道農業公社の農地保有合理化事業を活用した所有権移転を主体に規模拡大が進んでいる。経営耕地規模別の農業経営体数や経営耕地面積が特定の階層に集中していることも大きな特徴である。経営耕地面積規模別の農業経営体数は、かなり高い方である。

表1 新篠津村の農業構造の推移

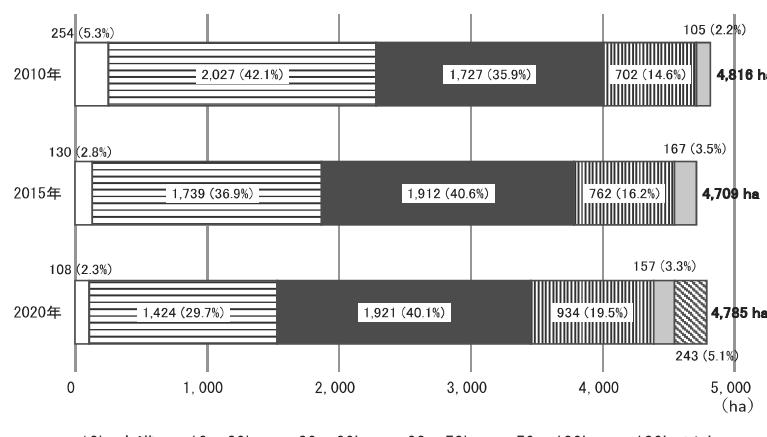
区分	2005年	2010年	2015年	2020年
農業経営体数（経営体）	323	275	247	223
5年前からの減少率（%）	-	▲14.9	▲10.2	▲9.7
経営耕地面積（ha）	4,830	4,816	4,709	4,785
うち田畠	4,745	4,723	4,456	4,115
畑	85	92	253	671
借入耕地面積	463	317	276	372
借入率（%）	9.6	6.6	5.9	7.8
1経営体当たり経営耕地面積（ha）（注1）	15.0	17.5	19.1	21.5
経営耕地面積規模別経営体数（経営体）				
5ha未満（注2）	24	18	18	13
5～10ha	58	28	12	10
10～20ha	177	134	112	89
20～30ha	51	73	80	80
30～50ha	11	20	22	27
50ha以上	2	2	3	4
総農家数（戸）	345	282	243	222
うち販売農家	323	274	243	221
自給的農家	22	8	-	1
基幹的農業従事者数（人）（注3）	812	732	636	534
65歳以上割合（%）	21.6	24.6	27.4	34.3
平均年齢（歳）	52.7	55.0	56.1	56.8

資料：農林水産省「農林業センサス」

注1：2010年以降の数値は、経営耕地を有する経営体の平均面積

2：「5ha未満」には経営耕地なしの経営体を含む

3：2005年から2015年までは販売農家、2020年は個人経営体

図1 経営耕地規模別農業経営体の経営耕地面積の推移
(新篠津村)

資料：農林水産省「農林業センサス」

一〇～二〇ha未満が最も多く八九経営体、次いで二〇～三〇ha未満が八〇経営体の順となつており、平均経営規模近辺の一〇～三〇ha層に七六%

の経営体が占めている。またこの五年間で、経営体数の増減の分岐点が二〇haから三〇haに拡大する様相を呈している。同様に規模別の経営耕地

面積をみると、一〇～三〇ha未満の層が最も多く四割の経営耕地を占めている。一〇～二〇ha未満の層を加えると、二〇ha未満の層を加えると、西階層に七割の経営耕地が集

積している（図1）。個人経営体の基幹的農業従事者に占める六五歳以上の割合は三四・三二%で北海道平均と比べて六ポイント、石狩管

内平均と比べると一二・五ポイントも低く、高齢化は着実に進行しているものの、他地域に比べると若い従事者によって担われている。

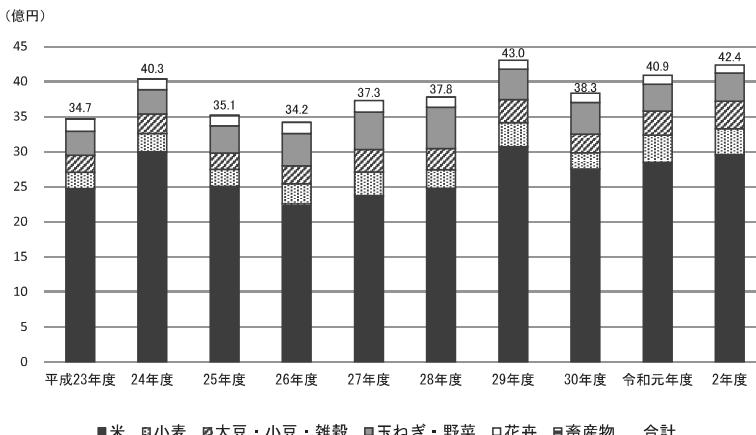


図2 JA新しのつの販売取扱高の推移

資料：JA新しのつディスクロージャー誌

に、小麦や大豆などの土地利用型作物と野菜や花きを組み合わせた経営が営まれている。JA新しのつ（以下、「JA」）といふ）の販売取扱高は近年四〇億円前後で推移しており、二〇一〇年度の取扱高は四二億円で、米が七割を占める（図2）。

クリーン農産物の生産が基本

新篠津村では有機農産物、特別栽培農産物、北のクリーン農産物をクリーン農産物と位置付け、その生産を推進してきました。一九九四年に役場やJAなどで「クリーン農業推進センター」（現在の「農業振興センター」）を設立し、土壤分析やボカシ肥の製造など土づくりを基本とした農業を進めってきた。「グリーンピュアクラブ」や「EM農法研究会」「オーガニック新篠津」など生産者による団体も二つした取り組みをリードしてきた。また、タマネギ、軟白長ネギ、ピーマン、米の四つの生産者

集団が、北海道独自の認証制度である「Y-E-S—!—e a n」の登録集団になっている。近年こうした取り組みは販路の拡大や販売価格の確保などに課題があり、なかなか伸びていないが、化学肥料・化學合成農薬の五割以上の削減が前提となる環境保全型農業直接支払交付金の実施状況をみると、二〇一〇年度は実施面積六六六ha（八九件）で、前年度より四〇ha以上増加しております、内訳はカバーフロップが一五五ha（四六件）、堆肥の施用が三四ha（六件）、有機農業三一ha（一〇件）、地域特認取組（フェロモントラップ）と耕種的防除を組み合わせたカメムシ防除技術）が四四五ha（五九件）であり、四千一

百万円余りの交付金が支払われている。村の四割ほどの農家がこの取り組みを行っており、多くの生産者にクリーン農産物の生産に対する意識が根付いている。

村では有機農業の取り組みについて、座学や栽培体験を通して理解してもらおうと、村外の消費者を対象に「有機農業塾」を開催している。

めざすは選ばれる 米産地

米の需給環境が厳しくなる中、JAでは米の作付けを維持しようと村とも連携し、他産地との差別化や米の販売拡大に努力している。



ライスファクトリー

国で初めてとなる「ライスファクトリー」（乾燥調製施設）を含めた米のグローバルGAPの団体認証を取得した。JAとともに新篠津村クリーン米

生産組合に所属する生産農家一一人も認証を取得している。一〇〇四年に青年部を中心にして新篠津村クリーン米生産組合は、道の「YESS!-clean」登録集団となっ

たが、制度の全国的な知名度が低く、そのメリットが見いだせずにいた。また、一〇一八年産からは行政による生産目標数量の配分廃止など国の米政策の見直しがあり、米販売の新たな展望を見いだす必要があった。JAからの呼びかけで、一〇一七年からグローバルGAPの取得をめざし、組織体制の整備や視察・学習会、各農場の整理や栽培履歴、農薬散布などの書類整理を行ってきた。JAでは基準を満たすよう「ライスファクトリー」の改修工事や、自ら作成した品質管理マニュアルに基づいて内部での検査や監査、是正確認を進めてきた。二〇一六年産は「七haで生産しており、「YESS!-clean」認証

とセットで「安全・安心」の付加価値を高め、消費者に訴えていきたいとしている。

JJA独自ブランドの「新しい米」は、ネットやふるさと納税の返礼品などで販売が増加傾向にあるなど、一定の

米を担当していない職員も含
括大に向けて活動している。

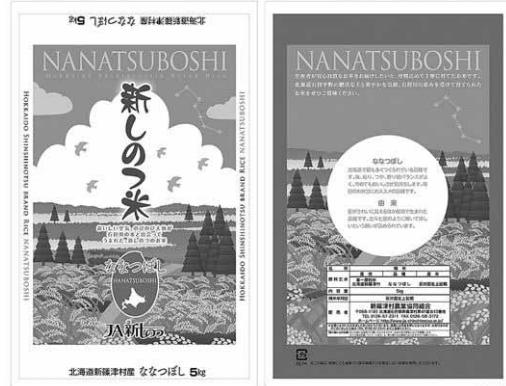
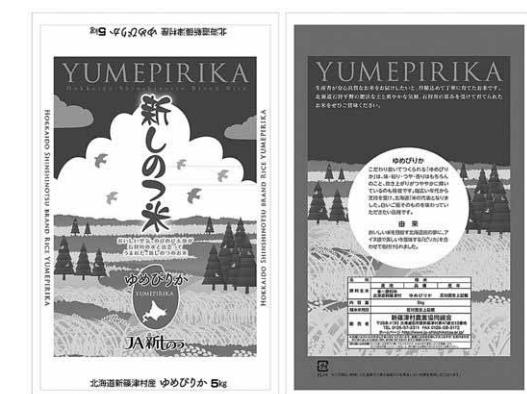
新篠津村では基幹産業であ
る農業を柱に、札幌圏に隣接

理事 1名からなる「ライスマー
ケティングチーム」を設け、
PRイベントの実施やパッケ
ージデザインの考案など、販路

「新しいのつ米」の販売を伸ば
そうと二〇一八年から、各部
署の若手職員一二名と非常勤
評価を受けている。JAでは

「新しいのつ米」の販売を伸ば
し合いついで、販売推進の強
化を図る考え方である。

コロナ禍を越えて 都市や消費者との 交流を



考案したパッケージデザイン

する強みや美しい田園風
景、しのつ湖や周辺の温
泉施設、道の駅などの地
域資源を活かして、都市
と農村との交流を推進し
て関係人口の増加を図り、
農業や地域社会の活力を
向上しようとしている。

コロナ禍で交流事業を中
止せざるを得ない中、新
たな試みやコロナ後を見
据えた取り組みが続けられて
いる。

昨年八月にはペルセウス座
流星群を、一〇月には十三夜
の月と秋の星座を、一一月に
は月食をメインに観測体験会
を開催した。参加者は専門家の
解説を聞き、肉眼の他、天
体望遠鏡で星座や月を観察し
た。直前まで天気の悪かった
三回目を除いて村の内外から
一五〇名もの人が集まり、星
空を堪能した。

(1) 星空で交流

村の主要イベントである
「青空まつり」などが中止に
なるなか、コロナ禍でも何と
かイベントができるいかと企
画したのが「星座観測体験会」

である。村内は平坦で高い建
物もなく、空を遮るものがない。
そこで村はふれあい公園
内にベンチと特注の大型星座
早見盤を設置し、星座観測ス
ポットとした。二六〇度見渡
せるまさに“天然のプラネタ
リウム”である。

(2) 直売で交流

村では二〇一一年、道の駅



しんしのつ産直市場

の隣に「しんしのつ産直市場」をオープンした。現在JAが運営しており、四月下旬から一月上旬までの間、季節の生鮮野菜や花、加工品などを販売している。本年度はオープン一〇周年を迎えて、コロナの感染対策を講じつつ通常どおり営業した。札幌などから

のリピーター客も多く、年間の来場者数は五万一千人、売上総額は六、一〇〇万円で、コロナ前と遜色ない実績となつた。登録生産者は九〇人ほどおり、店内では顔写真付きで生産者を紹介している。

JJAの「もぎたて市」部会（部会員約二〇名）は朝収穫した野菜などを、村内のホクレンショップ新篠津店の他、札幌市内のホクレンショップなど三店舗やホクレンくるの杜へ出荷している。今年度で一九年目になる。例年、六月から十月までは月に一度、部会員が札幌市内の店舗で対面販売を行い、消費者に野菜の説明や理調理方法などを説明し交流してきた。コロナ禍のため対面販売は自粛してい

る。

村外の販売フェアとして、札文島で漁協とタイアップし、新米の出回り時期に新米やハクサイ、ダイコン、タマネギなど旬の野菜をPR販売している。島民からも好評であり、今後も継続する考えである。

(3) 農業体験で交流

村やJAでは札幌市内の小学校の田植えや稻刈り体験等の受入れを積極的に行っていている。長く続けてきた受け入れもコロナ禍で作業体験が中止されているが、今後の継続に向けてつながりを保つ活動を続けていく。

村では二〇〇六年から、西岡北小の児童に届けた。JA青年部では一〇〇四年から札苗北小学校（札幌市東区）を受け入れている。五年生を対象にJAの試験圃で、青年部員が「師匠」となって田植えや稻刈り体験などを行い、米作りや農業の大切さを伝えている。収穫した新米は、「師匠」が学校に出向き、「お米受け渡し会」を行って児童

と新篠津小学校の児童が村の

「みのり交流農園」で田植えや稻刈り、脱穀などの作業体験を行い、米作りの大変さや食べ物の大切さを伝えている。精米した米は新篠津小の五年生が全員で西岡北小に届けていた。昨年秋の収穫体験は新篠津小だけで行い、村の教育委員会職員が精米した米を西岡北小の児童に届けた。

JJA青年部では一〇〇四年から札苗北小学校（札幌市東区）を受け入れている。五年生を対象にJAの試験圃で、青年部員が「師匠」となって田植えや稻刈り体験などを行い、米作りや農業の大切さを伝えている。収穫した新米は、「師匠」が学校に出向き、「お米受け渡し会」を行って児童

に手渡してきた。昨年は稻の生育状況を記録した動画や青年部員のコメントを届けた。

農業者やＪＡ、村で構成する「グリーンツーリズム新篠津」（一〇一一年設立、会員二四名、事務局・農業振興センター）では、関西の高校の修学旅行生の農業体験を受け入れている。空知地方などで広域的・組織的に農業・農村体験等の教育旅行を受け入れている「そらちのDEいふね」の加盟団体となり、連携して取り組んでいる。昨年一〇月下旬には一年ぶりに京都の高校生を受け入れ、日帰りの収穫作業体験を行った。例年であれば、年間一〇校程度、約一五〇人の修学旅行生を受け入れている。受け入れ農家の

モチベーション維持が心配されるが、今後も継続する考えである。

村の人々が見慣れた平坦な田園風景や農家にとつては当たり前のことが、都会から来たり前に想像以上に感動を与えている。

〈取材後記〉

新篠津村へ最初に取材の依頼をしたのは昨年の一月。こちらもコロナ禍で取材を延期してきたが、ようやく実現できた。コロナの収束が見通せない中、米の需給環境は一層厳しさを増してきた。村内の関係者からは、札幌圏の食糧供給基地としての誇りと稻作を何とか維持したいという強い思いを感じた取材となつた。

役場や農協の皆様には、取材の対応や資料、写真の提供など多くのご協力をいただきました。誌面を借りてお礼申しあげます。

一般社団法人
北海道地域農業研究所
特別研究員
三津橋 真一



むらの秋 豊かな稔り（手前は大豆、奥は水稻）と広い空